

沖縄の歴史意識が生んだ非戦反戦の思想

自らかちとってきた自由・人権・自治

琉球大学名誉教授 比屋根照夫

- 1 アジア侵略の起点という「琉球処分」再評価
- 2 文化的な価値の根幹を剥奪するための沖縄支配
- 3 近代沖縄の悲劇の象徴
- 4 復帰運動再考、そこから何を引き出すか
- 5 これからの沖縄は非戦反戦の誓

長い歴史をもつ琉球が明治日本に「併合」されたのが「琉球処分」であり、植民地支配に等しい「武断統治」による同化教育は、琉球語や沖縄の歴史否定のための政策だった。沖縄戦の悲惨を乗りこえ、長い抑圧、差別の時代を克服することで継承されていく沖縄の民衆意識はどこに向かうのか。

1

アジア侵略の起点という「琉球処分」再評価

一八七九年の琉球処分は沖縄が近代日本に組み込まれていった激動を象徴する事件でした。去年は琉球処分一三〇年、薩摩進攻四〇〇年の節目の年で、地元の新聞を中心としていろいろな企画がありました。

復帰前には、琉球処分問題は日本と沖縄の民族統一のありかたとして議論されました。それは当時日本における砂川をはじめとするさまざまな反基地闘争、日本国内におい

ての米軍基地や安保に対する革新勢力の高揚があつて、そういうなかで沖縄の問題が一つの大きな問題としてクロージアップされていきました。

沖縄では一九五〇年代のいわゆる島ぐるみ土地闘争や瀬長亀次郎・沖縄人民党書記長の当選があり、翌年には反米的な市長としてアメリカに追放される、そういう大きな流れがあつて、沖縄問題が日本における民族的な課題として、民族自決とか、民族的な統一とはどうあるべきかとい



うそういう形で議論されてきたのが戦後の第一期の沖縄問題です。そこでは琉球処分問題について、沖縄と日本が同一民族であるというところに評価の力点が置かれていました。

去年からはじまった島津侵攻四〇〇年、琉球処分一三〇

年という節目の年の議論には、戦後のそういうとらえ方が当時の社会・政治状況に規定されすぎていたという反省がありました。島津支配と琉球処分に對する新しいとらえ方が必要とされています。いままでのような民族的統一論というよりも、琉球処分という呼ばれ方そのもの、それを沖縄側から見たときにどうなるのか、そういうところに力点を置いてみるとうどうなのか。そこでは民族的統一論というよりも、琉球王国という独自の国家をもっていた（島津の支配はあつたにせよ）独自の外交、独自の文化を育てていた沖縄が明治国家に組み込まれたという側面、いわば明治政府の「武断政治」というものに焦点が当てられています。

はたしてこれは民族統一という名に値するものであったのか。反対の立場にたつて、むしろ琉球王国の時代を担った琉球士族層の明治國家に對する、琉球処分にたいする抵抗の歴史そのものを掘り起こすという研究テーマに注目が集まっています。その士族層は元々琉球王国の支配的な層

ひやね・てるお

一九三九年沖縄県生まれ。東京教育大学大学院博士課程修了。琉球大学名誉教授。この間インドネシア大学客員教授、シカゴ大学東アジアセンター客員研究員を経て、現在法政大学沖縄文化研究所客員研究員。近代日本政治思想史、アジア・沖縄関係史専攻。主な著書『近代日本と伊波普猷』（三一書房）、『自由民権思想と沖縄』（研文出版）『アジアへの架け橋』（沖縄タイムス社）、『近代沖縄の精神史』（社会評論社）、『戦後沖縄の精神と思想』（明石書店）ほか。

ですから、彼らは中国に亡命してこれを国際問題化するこ
とによって琉球王国の復興・再興運動を展開した。こうし
たアプローチからみたら、琉球処分は日本への民族的統一
というよりもむしろ琉球の日本への「併合」と見なすべき
ということになります。この併合を起点として日本がアジ
アに対する膨張的な政策を進め、台湾・朝鮮の併合、こう
いう一連のコースを歩んだという見方が強くなってきました。

これまで士族抵抗派の動き、彼らの思想、行動というも
のがほとんど顧みられなかった。こうした士族層の抵抗は
これまで見落としていただけであって、琉球処分に沖縄は
何の抵抗もしなかったわけではなく士族層を中心にした広
範な民衆的な抵抗があったというところが琉球処分
一三〇年の議論の中で展開されています。

独立性の強かった沖縄の文化というものが、日本に組み
込まれていく中で沖縄の輝きというものが失われていきま
す。沖縄統治、それは、沖縄をどう同化して日本化してい
くかということによって、歴史的個性や地域的独自性が失
われていったのです。そこに近代沖縄の苦しみ、苦痛の歴
史の第一歩がはじまったのです。そういう歩みをどうとら
えたらいいかということが盛んに問われていることが、去
年から今年状況です。

2

文化的な価値の根幹を剥奪するための沖縄支配

沖縄統治にあたって、近代日本は、土地制度とか根幹に
あたる部分はあまりいじらなかつた。琉球処分の時に強烈
な抵抗にあったために沖縄の旧慣制度を使いながらじよ
じよに日本化する方法をとりました。教育を中心にした日
本人化であつたわけですが、その結果、沖縄固有の文化、
言語あるいは琉球の伝統芸能などの価値を否定していきま
す。琉球処分によってスタートした大きな変動は文化政策
に認められます。歴史湮滅策といつていいでしょう。言語
や文学や伝統芸能や宗教、そういうもののトータルを、価
値を剥奪し、継承しない方向に導いていった。明治末期の
あたりになつてくると、「おもろそうし」など伝統文化も廃
れてしまつてすべてを後に再評価しなければならぬ時期
がやつてくることになつてしまつたわけです。同化政策に
よつて沖縄の文化はすべて断絶させられてしまいました。

沖縄は、中国との間で朝貢関係があつたし、中華冊封体
制の中にあつたわけですから、沖縄の歴史文化をそこでふ
れなければ、東アジアにおける沖縄の位置はわからないわ
けです。明治期の教育政策が一番恐れたのは、沖縄の歴史
文化を掘りおこすことは、沖縄が過去に戻つていつて日本
帝国臣民としての生き方から離脱してしまうのではないか

という危惧、これが当時の教育界の主流にありました。ですから、歴史湮滅策がとられたのです。

植民地政策とはその地域の人びとの文化的な価値の根幹を剥奪することによって人びとの人間性、尊厳を喪失させることと聞いていいでしょう。そうやって沖繩の文化が否定されていったのが明治の末期くらいまでの流れです。

植民地主義に対する抵抗というのはまず自らの文化をどう認識し、どう評価するかというところからはじまります。たとえば、フィリピンのホセ・リサル。彼はスペイン統治下でフィリピンの文化的価値を再発掘していきました。中国の魯迅も中国人のもっている事大主義的体質を批判しましたが、中国の民衆文化を重視してどうやって人間を改革していくかという課題を担っていました。そうみていくと、沖繩でもそういう流れの中で植民地主義に対する抵抗が出てきて当然でした。沖繩でその役割を果たしたのは伊波普猷やそれを取り巻く青年たちでした。沖繩の歴史、文学、言語、民俗、そういうものをトータルにとらえて沖繩の人間がどこに立脚しているかを提示したのです。伊波の『古琉球』という著作を読むと、沖繩の歴史的な流れが示されています。おもしろそうしの価値、琉球王国が持っている価値を再評価しようとしています。二〇世紀初頭のさまざまな民族運動、アジアの民族運動が起こってくる、

ほぼ同じ時期に彼は思想を形成していきます。

一つは日本と沖繩が持っている同質性、もう一つが日本と異なった文化、異質性これが伊波普猷の生涯を取り巻く二つのベースになっています。彼がなぜ日本と沖繩の同質性あるいは日琉同祖論(厳しい批判を浴びているのはまちがいありませんが)、彼がそれを言わなければ、証明しなければいけないのか。日本と沖繩の間にもすごい大きな塹壕があつたと彼はいつているわけです。伊波は塹壕をなんとか埋めようとした。その思いが強くなりました。その塹壕とは何かというと、琉球処分によって日本国民になつたものの実際には沖繩の出身者は近代においては日本のなかの異人種としてみられて様々な差別問題が出てくるわけです。日本と沖繩が接触したものの四〇〇年―五〇〇年にわたって日本の幕藩体制外にあつて独自の国家、歩みをしてきた琉球がいきなり日本のなかに投げ込まれたら当然のこととしてそうした反応があつたわけです。そのことが当時の明治の若い世代が直面した悲しい、厳しい現実でした。

新聞人だつた太田朝敷などの言論人になるともつと激しい批判をやっています。われわれは被征服者であるということばを使って当時の沖繩県の政策批判をおこなっています。文化は否定され、アイデンティティが否定される状況

のなかで、それをもう一度再構築する、人間回復というべきか、それが伊波普猷の学問でした。それは学問というにはあまりにも現実的で実践的などころから出発していません。そういう意味で、彼は日本と沖縄は同一であるということによつて沖縄が受けた傷跡を少しでも癒そうと考えたわけです。それが伊波普猷の一つの側面です。

もう一つは沖縄は日本と異なっているという異質論です。これは琉球語や文化や芸能などをみれば、当然異なつた面があるということ、長い中国との関係、アジアとの関係、そういうもののなかで培われ育まれた文化は、日本の中でも異質の文化です。ある意味では、日本という国に囲い込まれなければ、むしろアジア的な近代の方向に沖縄が向かう可能性が十分にあつたといふことができますね。そういう二つの世界をみなければ沖縄がわからないといつたのが『古琉球』の中に出てくる伊波普猷の個性論です。沖縄文化は沖縄人でなければ、発現できないそういうものだと彼はいつて、非常に強い沖縄人意識と日本人としてどう生きていくかという狭間で激烈な緊張のなかにいました。

伊波普猷というのは、先ほども言ったように抑圧された民族、国が必然的に生み出した人物であるといふことです。ある種コロニアリズムに対する抵抗の側面といふのが強くありました。あの文章の深みといふものは沖縄の歴史

を背負つた人間のことばです。それが明治という時代の沖縄の大きなデッサンといえるでしょう。

伊波普猷の悲劇は、彼が目指した近代とまったく異なる方向に日本が向かつて行つたことです。日本には様々な地域性、さまざまな文化をもち、アイヌや沖縄も含めて多様な国家になることを、伊波は目指していた。民族的、地域的、文化的個性の幅の広さ、それを日本という国がどれだけ余裕をもつて異なる文化を抱合できるかといふことを考えていたわけです。しかし、沖縄の経験からおしてみて、そういう日本のあり方はすべて瓦解したといつていいでしょう。

3

近代沖縄の悲劇の象徴

沖縄の明治大正を見ていると、沖縄では社会主義運動、無産運動がさかんでした。それは、歴史が当然示すところでは、徳田球一のような共産党の創立者が出ていますし、ゾルゲ事件に係わつた宮城与徳もいます。その周辺にさまざまな運動家が輩出しています。あまりにも差別と抑圧が強かつたために、勢い反体制運動に向かつていきました。

たとえば、移民で出て行つたグループが中心になつて日本人に対する差別や排日法に対してロサンジェルスでおこ

なった社会運動は、日本人の移民社会のなかでも突出した動きでした。沖縄出身の青年たちが多数集まってそれに参加して行きます。そういうなかからアメリカで逮捕されてロシアに追放されていく一二名の青年たちがいました。その内の半分は沖縄北部地方、貧困地帯の出身でした。彼らは日本に送還されるのを拒否してソ連に渡ります。当時は輝ける社会主義の国だったからです。日本に帰れば治安維持法によって逮捕される。それで、積極的に望んでロシアに渡った。しかし、ロシアで彼らを待っていたのはスパイ嫌疑でした。社会主義国家、労働者の国を夢見て渡った彼らの運命は、スターリンの大量粛清の嵐が吹き荒れるさなかで翻弄されました。彼らは次々と銃殺されていってしまい、悲劇的に人生を終えました。

沖縄のような小さなところから移民として渡った青年たちが、社会主義に目覚めて労働者の社会を目指した結果、無惨に殺されていった。日本の近代史上でこれほどの多数の人たちが社会主義を標榜したソビエトで粛清されたのは、希有なケースです。彼らは沖縄というところに生まれ、抑圧の歴史を背負っていたといえるべきでしょう。彼らのなかにスパイ嫌疑を最後まで頑健に拒否した照屋忠盛がいました。彼の兄・忠英は沖縄で校長先生をしていました。このお兄さんの校長先生は戦時下に国頭でスパイの嫌疑で日

本軍に殺されました。弟はロシアで、スパイの嫌疑で銃殺され、兄も日本軍にスパイ扱いされて殺された。沖縄の近代がいかに過酷な時代であったかという象徴といえるでしょう。ロシアに行つて粛清されたいわゆる「アメリ亡命組」(アメリカ亡命)というものと宮城与徳のようにゾルゲ事件にかかわつて獄死するというケース、これはまさに沖縄の近代を象徴する事例だと思います。

社会主義運動のいっぽうで、多数の沖縄の人びとは一生懸命日本人になろうとして努力していくわけです。その皇民化の極点とも言うべき沖縄戦を迎えました。伊波普猷たちが描いていた夢は粉々に打ち砕かれました。沖縄戦のなかでなにがあったかという点、日本軍による住民虐殺、沖縄人敵視でした。日本の国内では他に例がありません。自国の軍隊が住民を敵視、スパイ視するその背景には伊波普猷が明治時代に苦しんだあの埋めがたい塹壕がありました。明治大正昭和を通じて沖縄というものの文化を否定しつくしてきた日本のまったく変わらなかつたその姿勢が極端な形で現れたのが沖縄戦でした。日本軍は、琉球語を使うものをスパイと見なしています。

つまり一般住民の普通の会話すら許さなかつた。そこに沖縄の人びとを同胞として見る、住民を守るといふ視点はまったくなかつたわけです。日本と沖縄の近代の破局、そ

の無惨な帰結は血塗られた形で終わりました。

4

復帰運動再考、そこから何を引き出すか

そういう悲惨な経験をした沖繩が、なぜ戦後に復帰運動をしたかとよく聞かれます。沖繩戦によってあれだけ犠牲を出したにもかかわらず、沖繩を米軍統治に追いやるという日本の沖繩に対する姿勢が、沖繩の人びとがもっている最大の不信です。戦争と犠牲、軍民混在の闘いのなかで戦った沖繩が、今度は日本によって米軍政下に放り出された。暗黒の五〇年代といわれたように、人権や言論の自由、基本的権利がまったく無視された社会でした。

そういうなかでどうやってこれから沖繩が生きていくべきかというときにさまざまな選択肢が出てきます。独立論や信託統治論、日本復帰論などが戦後に出てきます。やはり戦前の日本への記憶があつたというべきでしょう。アメリカの支配があまりにも強権的すぎた。沖繩の人びとを劣悪な生活環境において、軍事基地を強制的に接収するし、強姦や暴行や殺人というありとあらゆる犯罪が米軍兵士によって引き起こされていたことが五〇―六〇年代の沖繩の状況でした。そこから脱出する方法として「日本」という国を沖繩の人がもう一度選択し直したということなのです。

これが正しい結論であつたかどうかについて今、活発な議論がおこなわれています。特に若い人たちの間に復帰論再考という議論が根強い。ただ、あれだけの大衆的な運動をたんなるナシヨナリズムの運動としてとらえてしまうと、あの壮大な運動はまったく無価値だったのかということになりかねない。そこから何を引き出すかという議論をたててみる必要があるのではないのでしょうか。

あの中には「非戦平和」の思想があつたし、人権の思想があつたし、人間の自由平等を求める思想もあつた。復帰運動といつて一口に言ってしまうますが、そのなかにはいろんな運動、たとえば、主席公選を主張する公民権運動、教職員・公務員のストライキ権を求める闘争、渡航制限を撤廃させるための運動、沖繩の米軍基地を撤去させる安保廃棄のための運動、終局的に様々な運動が復帰という形でまとまっていきました。個々の運動の高さというのも、そこから評価し直さないと、何もなくなってしまう。

私は復帰運動とひとくくりにすることをやめて、ある時代、地域の個々の運動の総体として沖繩の米軍統治下の運動を考えなければいけないと思います。そう考えることによってあの運動のエネルギー、民衆のエネルギーを評価すべきだという議論を一度やってみなければなりません。

これからの沖縄は非戦反戦の砦

沖縄の運動と憲法論とを重ねていうと、沖縄は人権の空白地帯だったわけですが、そこから一つ一つ言論の自由、思想の自由、公民権を勝ち取っていった。それは与えられたものではありません。占領軍によって自由を与えられたという日本の戦後の歴史とちがって沖縄では民主主義を自分の手で闘いとった、そういうちがひがあります。その経験がいままで沖縄で様々な問題が起こったときに、よみがえって来るのです。県知事だった大田昌秀さんの基地使用の代理署名拒否、最近の辺野古の軍事基地建設反対運動にしろ、底流に流れているのはアメリカ統治下で戦ってきた体験、記憶の蓄積です。さらにそれを次の世代へと継承していった成果です。

たしかに憲法の平和主義は、沖縄の犠牲によって戦後六〇年日本国民はその恩恵を享受できたわけです。忘れてならないのは、そこで沖縄が安保条約のすべての重圧を引き受けることによつて平和主義が成立していたという事実です。そのことはいろいろな人が指摘していることですが、これは繰り返し言われなければならない。ですから、島ぐるみ土地闘争からはじまって最近の大田さんの代理署名拒否、そして今の反基地運動のなかで、いまやもう沖縄では、

県議会で沖縄の普天間移設問題で自民公明含めて全会一致で県外移設を決議しています。

そういうことのできる風土、それは沖縄が安保の重圧を背負わされて戦ってきたからです。辺野古では基地の建設に反対する稲嶺進市長が誕生した。今や沖縄は戦後、何度かおとずれた精神的に高揚しつつある時期を迎えています。この状況で仮に陸上案などというのが言われたらどうなるか。かつて移設に賛成した辺野古周辺の集落の人たちが先日、反対決議をおこなって沖縄防衛施設局に申し入れに行きました。もし、陸上案、滑走路をつくるということになったら総決起阻止行動にたつと言っています。生活がかかった本気の闘争になるでしょう。もしそういう形に普天間基地をもつていったら、大きな爆発が起きるにちがいない。

沖縄の歴史は、戦前戦後を通して、抑圧された経験や差別を受けた経験を継承しながらあの沖縄戦の悲惨な経験が底流になって今の行動の原理につながっています。沖縄の反戦非戦という流れは近代から現代にいたる歴史のなかで脈々としたものです。朝鮮戦争やベトナム戦争のときには沖縄は戦争の砦として沖縄の基地を使われたけれども、今の国内の基地縮小・撤去にむけた大きな流れのなかでは、沖縄が新しく非戦反戦の砦としてあり続けなければならぬと考えています。